



## 西嶋八兵衛の屋敷跡

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

建てて彼を祀り、水分神社として今に残る。さて、このように極めて優秀な土木技術者であり、為政家であった西嶋八兵衛だが、書道についても入神の域に達していたという。その真筆を刻したという碑が、高松の誇る栗林公園に保存されている。それは普通の川石に「大禹謨」とのみ刻まれた簡素な碑であり、西嶋八兵衛が手がけた香東川の改修工事に由来するという。(つづく)

**飛** 渡神社碑を写真に撮っていると、同行者が「眠い、眠い」を連発しはじめた。同行者は心底疲れると、やたらと眠気をもよおす。小さい子供と一緒にのだ。急いで栗熊駅にもどり、駅前のおどん屋でさらに栄養補給を試みるが、まったく回復の兆しがない。本当は二つ先の滝宮駅で降りて、萱原用水を開削した功績によって、やはり神に祀られた久保太郎右衛門の大久保神社と「積徳成仁」の碑を見たかったのだが、もうあきらめた。高松まで直行し、ホテルで休ませることにする。

そうして高松のホテルに着いたが、チェックインは一六時だという。まだ一時間以上もある。幸い、電車の中で休んだせいか、同行者はいくらか回復した。せっかくだから、ここから近い西嶋八兵衛の屋敷跡をみて時間をつぶすことにする。

その屋敷は、高松市番町の高松市埋蔵文化財センターのあたりにあったと伝えられ、現在は彼にちなんで高松と水をテーマとした、屋外展示スペースも整備されている。西嶋については三月号において、約四五〇年間も廃池となっていた満濃池を修築した人物として紹介したが、少し詳しく触れてみたい。

西嶋八兵衛は、慶長元(一五九六)年に現在の静岡県浜松に生まれた。彼が十七歳のとき、伊勢の津

藩主・藤堂高虎の目にとまり、禄を受けることとなる。藤堂高虎といえば、城郭や城下町の設計に手腕を発揮した武将であり、西嶋は主君の薫陶をうけて土木技術を磨いていったと考えられる。

時に元和七(一六二二)年、高虎の女婿にあたる高松藩の三代目藩主・生駒正俊が没し、嫡子の高俊が十一歳という幼さで四代目藩主となった。高虎は孫の後見人となり、西嶋はこの世襲処理のために初めて讃岐の土を踏んだ。

その後、雑事を終えていったんは帰藩するものの、彼の才能を見込んだ高松藩に請われて客臣として迎えられる。この時、寛永二(一六二五)年。ちょうど彼の再訪を待ちかねたように、地震、大干ばつなど続けざまに見舞われた。そこで西嶋は高松藩恒久の繁栄をはかるべく、灌漑施設の整備に奔走することとなり、寛永十六年に津藩へ戻るまでに満濃池をはじめ九〇箇所以上のため池を手がけたとされ、高松藩は六万石の増収をみたという。

帰藩後もその才は衰えることなく、用水路開削や新田の開発などを手がけ、慶安元(一六四八)年には山城・大和の津藩領を束ねる城和奉行や、伊賀奉行などを歴任し、延宝八(一六八〇)年に八十五歳で没した。その死後、三重県津市高茶屋では小祠を



西嶋八兵衛の屋敷跡周辺。現・高松市埋蔵文化財センター屋外展示スペース

[交通] JR高松駅、琴平電鉄琴平線瓦町駅、高松築港駅、片原町駅よりいずれも徒歩約15分